

創世記

「地は混沌であって、闇が深遠の面にあり、
神の霊が水の面を動いていた」

旧約聖書はいわゆる天地創造を描いた「創世記」で始まる。アダムとイヴ、失樂園、カインとアベル、ノアの方舟、バベルの塔、十戒などの有名な逸話が含まれており、古代ヘブライ語によるユダヤ教・キリスト教の聖典とされている。

世界の創造からユダヤ民族の興亡を綴った旧約聖書に対して救世主としてのイエスの生涯とその教義に焦点をあてたのが新約聖書だ。旧約・新約の「約」とは神と人間による契約を意味している。

空間から時間の創造へ

「創世記」の冒頭の部分を旧約聖書の新共同訳から引用してみよう。

初めに、神は天地を創造された。
地は混沌であって、闇が深遠の面にあり、
神の霊が水の面を動いていた。
神は言われた。「光あれ」
こうして、光があった。
神は光を見て、良しとされた。
神は光と闇を分け、
光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。
第一の日である。

この記述によると、神はまず空間を創造した。地表は闇と水に覆われ、神の霊は水の上すなわち地上を見下ろす位置にあったことがここから読みとれる。「地は混沌であって」とダイレクトに表現されているように地表の水は世界が誕生したときの原初的な混沌＝カオスの象徴となっている。

空間の次は時間の創造だ。「光あれ」という言葉と共に闇のなかに光が生じ、世界は光と闇に分裂する。光は昼、闇は夜の象徴でここから時間という概念が生まれてくる。

神はまず混沌とした闇＝水の空間と共にあり、そこに光を与えて昼と夜からなる時間を創造した。空間から時間へという創造の回路が「創世記」による天地創造の第一日目となる。



混沌と秩序を象徴する水と神

「創世記」では混沌とした世界に秩序を与える者としての神の姿が描かれる。水が混沌の象徴だとしたら、神は秩序の象徴とっていいだろう。それが端的に示されているのは次の箇所だ。

神は言われた。
「水の中に大空あれ。水と水を分けよ」
神は大空をつくり、
大空の下と大空の上に水を分けさせられた。
そのようになった。

空は水を分けてつくったものだという。青い海とその上に広がる青空を思い浮かべるとイメージしやすいかもしれない。

神はまるで画家のように水を塗り分け、対称的な自然として海と空をデザインした。つまり混沌の象徴としての水に秩序を与えたということだ。

混沌の象徴としての水に秩序を与えるという神のイメージは「創世記」以降もしばしば描かれる。人間との関係でいえば混沌の象徴としての水は試練や苦難や脅威の象徴ともなり、水＝自然に翻弄される人間とそれを救済する神という象徴的な構図が生み出される。

大洪水のあとの契約

混沌の象徴としての水がもっとも劇的に描かれ



るのがノアの方舟の物語だ。

人間の悪徳に怒った神は神に従う無垢なノアに大洪水を引き起こすと告げ、唯一の救済の道として方舟の建設を命じる。

ここでの神は混沌に秩序を与える創造者ではなく、混沌＝洪水を支配する激しい破壊者としてあらわれる。

見よ、
わたしは地上に洪水をもたらし、
命の霊をもつすべて肉なるものを
天の下から滅ぼす。
地上のすべてのものは息絶える。

ノアは伝道して神の言葉を人々に伝えようとしたものの、だれも耳を傾ける者はいなかった。彼は3階建ての巨大な方舟を完成させると、家族とすべての動物のつがいに乗せて来たべき日にそなえた。

雨は40日間にわたって降りつづき、大洪水によって地上に生きるものは滅び去った。だが方舟に乗ったノアたちだけは生き残り、現在のトルコ東端のアララト山にたどり着いたという。

ノアは鳩を放って水が引いたことを知り、家族や動物と共に方舟を降りる。そして祭壇を築き、神に祈りを捧げた。

神はノアたちを祝福し、今後は決して人間を滅ぼすような大洪水は引き起こさないと契約する。いわば神と人間はここで和解したとっていい。その証しとして神は空に虹をかけたと伝えられている。
(高倉)